様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００２３

研究課題名（和文）日本流入の中国書画に関する新旧収蔵家ネットワークの復元的研究

研究課題名（英文）Representation of the Modern Network for Assembling Chinese Calligraphy in Japan

研究代表者
菅野　智明（KANNO, Chiaki）

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：９０２７２０８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本が近代以降に流出した中国書画の一大集積地となった要因について、日中双方の収蔵家間ネットワークの形成過程と、その構造的特徴の側面から解明するものである。研究の手順として、流入した代表的な中国書画を実地に調査し、それらの収蔵履歴を辿るとともに、そこに窺える主要収蔵家より、収蔵をめぐる交流の事跡を探った。更に、そうした収蔵家間ネットワークについて、グラフ理論に基づく社会的ネットワーク分析の手法によって分析し、近代日本における中国書画収蔵が急速に展開した背景についても考察を加えた。

研究成果の概要（英文）：This study examines factors that made Japan a major collection center of Chinese calligraphy in modern times, by focusing on the process and characteristics of a structured network of collectors both in Japan and in China. Fieldwork was first conducted to identify representative collections of calligraphy assembled in Japan and to trace the collections' history, and then to investigate interactions among major collectors. After that, the collectors' network was analyzed by employing social network analysis based on graph theory. The background of the rapid assembly of collections by way of this network was also analyzed.

研究分野：中国書学・中国書法史

キーワード：美術史　収蔵　社会的ネットワーク分析

１．研究開始当初の背景

(1) 研究動向

近代に中国から流出した書画の名品に関する研究は、例えば冨田昇（2002）、関西大学（2009,2013）、関西中国書画コレクション研究会（2011,2012）など、近年頓に成果を挙げつつあるが、これらは概して個別的な収蔵家および特定の画商との交流事跡の集積を中心とするもので、収蔵家たちが形成したネットワークそれ自体の意義は回顧されていない。

(2) 着想の経緯

茶道史の分野では、茶人の交流に関し、ションタル・Ｍ・ウェーバー（2007）などに、社会学において近年注目されている社会的ネットワーク分析を援用した例が認められ、また民俗学の分野では、手塚薫（2011）にも、この分析に基づく研究が備わる。これらは、人々の行為の選択が組織や集団の構造から影響を受けるという「構造的選択」（安本雪2001）の考え方と軌を一にするものである。ゆえに、ネットワークのあり方は、書画収蔵家にあっても、その収蔵活動を無意識的にも規定してしまう側面を有することが強く示唆され、その解明が喫緊の課題とされる。

(3) 既往研究の展開

既に研究代表者・菅野智明（2010）は、清末における屈指の収蔵家・端方の碑拓収蔵に注目し、彼の収蔵品が、夥しい幕僚・賓客の鑑定を経たものであることを明らかにし、そこに端方の広汎な人脈が備わることを指摘した。また、研究協力者・下田章平（2010,2013）は、中華民国期の収蔵家・完顔景賢の収蔵事跡の跡付けと、その収蔵品の流散について、関係する収蔵家の動向とともに検討を重ねてきた。これらの研究を素地とすることにより、近代日本に流入した中国書画をめぐる収蔵家論を新たに展開することは十分可能であった。

２．研究の目的

(1) 社会的ネットワーク分析の導入

本研究は、日本が近代以降に流出した中国書画の優品の一大集積地となった要因について、日中双方の収蔵家間の交流を網羅的に追跡し、そこに認められる収蔵家間ネットワークの形成過程とその構造的特徴の側面から解明することを目的とする。

具体的には、上述の社会的ネットワーク分析の方法を援用し、「日本流入中国書画に関する収蔵家ネットワークグラフ」の復元的描出とその分析に重点を置きつつ、収蔵家個人間の交流を超えた集団や組織の構造と機能に、主要な中国書画が日本に流入した鍵を見出す。これにより、美術史における学際的な新方法の提起も視野に入れるものである。

(2) 美術史および隣接領域における意義

本研究は、上記のように社会学の方法を導入した学際性が特筆される。この方法は、美術史学における他のネットワーク研究にも広く援用が可能であり、更に本研究が美術史で導入を図った成果は、芸術・文化の歴史研究に関する種々の領域での波及が見込まれる。また、本研究の場合、特に中国における収蔵家の動向も注視し、日本の収蔵状況との比較を主眼に据える点が特徴とされる。それは受容美術史に比較美術史を加味したという点において、新たな沃野を拓くものである。

３．研究の方法

(1) 研究体制

本研究は、中国書画の日本流入に深く関与した日中双方の主要収蔵家に対する個別研究と、そこから導かれる収蔵家間ネットワークに対する社会的ネットワーク分析という、大きく二つの段階から構成される。この点を踏まえ、研究体制は、主として個別的研究を進める者と、社会的ネットワーク分析を進める者の二層で編成した。内訳は以下のとおり。研究代表者・菅野智明（研究の統括）、研究分担者・猿渡康文（社会的ネットワーク分析の調査・研究）、研究分担者・増田知之（法帖収蔵に関する調査・研究）研究協力者・下田章平（中国書画収蔵に関する調査・研究）

(2) 個別的研究

① 流入中国書画の実際とその収蔵家

近代以降に流入した中国書画を実地に調査し、その収蔵履歴について、題跋や鑑蔵印、或いは各種蔵品著録をもとに精緻に復元する。

② 主要収蔵家の絞り込みとその交流事跡

上記に基づき、当該作品の日本流入に深く関与した収蔵家を洗い出し、特に影響力を誇った収蔵家を重点的な検討対象としてゆく。その際、当該の収蔵家が他の収蔵家といかに交流したか、その事跡についても丹念に跡付けてゆくことにする。

(3) 主要収蔵家のネットワーク分析

①分析にかかる諸データの採取

収蔵家間のネットワークにかかる事跡ついて、年代・時期、地域、有向・無向の別、つながりの性格（個別対面、グループ対面、紹介、贈呈）等の諸観点から、データを抽出する。

② ネットワークグラフの作成と分析

ネットワーク可視化・分析の専用ソフトCytoscape(version3.4)の活用により、ネットワークグラフ（グラフ理論に基づくノードとエッジによる構造図）を作成し、その分析を進める。分析に際しては、平均最短長路、媒介中心性、近接中心性、クラスタ係数、次数中心性等の諸指標に基づきつつ、特にネットワークの構造的特徴の把握を目指す。

４．研究成果

(1) 個別的研究の成果

① 中国側収蔵家

・端方（1861～1911）

端方は、清末最大の収蔵家として知られる。研究協力者・下田は、彼のコレクションの公

開、図版の出版刊行、対外情報発信の側面から彼の進歩的な収蔵態度について考察した。このような端方の収蔵態度は、ファーガソンとの交流によって、少なくとも湖北巡撫在任時より見られた。また、端方は中国書画を自身の私設博物館に収蔵し、「公共的鑑賞」や「眼福の共有」によって散佚を防ぎ、中国国内での保全に努めようとしたが、一方で端方の進歩的な収蔵態度は中国書画の海外流出を促す契機にもなった。すなわち、辛亥革命で端方が横死すると、すでにそのコレクション情報を得ていた海外の収蔵家らによって、特に『壬寅消夏録』収載の優品が購入されることになったのである。また、この中国書画の海外流出は、中国国内でのその保全を考えていた端方にとってはおそらく意図したものでなかったが、中国書画の保全という観点からみれば高く評価できる。つまり、端方のコレクションが売却された民国期は、辛亥革命による夥しい書画を含めた文物が放出された時期であり、このような状況のもとで、端方旧蔵の中国書画が海外のしかるべき収蔵家（収蔵機関）に購入され、今日までその命脈を保つことができたのは、清末に端方が当代一流の鑑定家に自身のコレクションを評価させ、その信頼すべき情報を海外へ発信させていたからである。

・鄭孝胥（1860～1938）

鄭孝胥は、清朝末期から民国期にかけての著名な政治家であり、かつ当時を代表する書人でもあった。研究分担者・増田知之は、鄭が自ら認めた『鄭孝胥日記』の種々の記述に基づき、鄭が、その数度にわたる日本滞在中は勿論のこと、中国―更には満州国―においても実に多くの日本人と頻繁に交流を重ねていたことを明らかにした。鄭は、彼ら日本人の需めに応じて様々な書跡の揮毫を行うだけでなく、収蔵家の所蔵品を目睹・鑑賞したり、日本人の書画に対して品評を加えたり、更には書道団体（「日本書道作振会」）主催の講演会において「学書の経験」を語ってもいる。このように、中国の伝統文化に対する深い尊崇と矜持の念をもった鄭孝胥によって、当時の中国の書文化がリアルタイムで日本人に直接伝播した実態が浮き彫りにされた。

・羅振玉（1866～1940）

羅振玉は、辛亥革命を機に内藤湖南の勧めによって京都に寓居し、内藤とともに、大量の中国書画を日本へ流入せしめた主導者として知られる。実は羅は、革命以前の 1909 年、清朝の命で訪日し、主として東京に滞在しつつ、同地の中国学者や中国文物の鑑蔵家と広く交わっていた。この訪日の模様は、他ならぬ羅の日記「扶桑再遊記」から克明に辿ることができる。研究代表者・菅野智明は、この日記を手がかりとし、羅が東京で交わった中国学者・鑑蔵家・出版人・書法篆刻家等を分析するとともに、帰国直後の羅の活動を跡づけることによって、羅が革命後の京都における日本人士とネットワークを形成したこととは別に、東京の日本人士とも既に固有の結び付きを強めていた点について、検証を試みた。京都に寓居した羅が、文物資料の影印刊行に精力的であったことは、既に指摘されるとおりであり、羅の文物資料の影印には、清末に形成された新しい収蔵観・出版観が反映されているが、羅は京都寓居に先立ち、東京の主要な中国文化界人士と短期間に相次いで交わることによって、それに因む文物資料を七條愷のもとで影印するまでに至っていた。それは、京都での実践の萌芽と呼ぶに相応しく、羅と中国文化界との交流が、かかる萌芽を促す豊かな土壌となったことが明らかとなった。

・顔世清（1868～1928）

顔世清は、中国書画碑帖の収蔵家として知られ、日華絵画聯合展覧会の発起人の一人として、日本人と親密な交誼があった人物でもある。研究協力者・下田章平は、この展覧会について、関連する新聞や雑誌の記事などによってその概要を確認した上で、展覧会開催の契機と目的やその意義、特に顔コレクションが日本に将来された背景について検討した。展覧会開催の契機は民国７年に渡辺晨畝が顔に日本での開催を要請したことによるものであり、その目的は「東洋画」の共同研究と再興及び自身のコレクション図録の刊行にあった。展覧会の開催の意義は三点確認することができた。第一に日中親善に好影響を与え、日本で日中両政府が主催した中国の古書画展覧会の先行事例として位置づけられることである。第二に、この展覧会の開催によって顔コレクションの中国絵画は当時日本に伝わる古渡に十分に見られなかった北宋の山水画、元末四大家である王蒙を含む元・明・清の文人画の作例を提供した点に意義があったが、新来の評価が定まらなかった当時の日本ではその評価は二分したことが明らかとなった。第三に、展覧会が一つの契機となり、顔コレクションの優品が日本に将来されたことである。顔コレクションはこの展覧会や顔の二度の来日の後に、葉恭綽のように次代を担う中国人収蔵家に渡ったものもあるが、日本の収蔵家に収儲されたものも少なくなかった。このことは展覧会開催の真の目的が顔コレクションの売却も兼ねていたからであり、曾布川寛氏が指摘する顔の蔵品の「売り込み」について実証することができた。しかし、顔が日本に自身のコレクションをもたらした最大の背景には、顔が書画碑帖の保全を第一に考える賞鑑家としての矜持があったからであり、自身の愛玩するコレクションの行く末を信頼する日本のしかるべき収蔵家に託したものと判断した。

② 日本側収蔵家

・内藤湖南（1866～1934）

内藤湖南は、日本の政財界の名士との幅広い交流によって、流入した中国書画の購得を彼らに周旋し、その点から羅振玉とともに、近代日本における中国書画流入の中核的役

割を担った一人である。内藤は流入中国書画の逐一に跋を寄せることで、購得・収蔵者に対し自身の見識を披瀝していったが、研究代表者・菅野智明は特に内藤が閲した王羲之関連の書跡に注目し、それらがどのような日本人士に渡り、内藤はそれらへの跋で、王羲之書法をいかに論じていたか、この点について検討を加えた。この際、『大阪朝日新聞』に1909年11月24日から27日にかけて寄せた内藤の記事「敦煌発掘の古書」より「温泉銘」の解説（同26日掲載）と、上記諸跋の言説との比較によって、内藤の王羲之書法観を探ることとした。その結果、「温泉銘」解説における書法論は、各種王書の優劣・序列を体系的に論じた点において、内藤の王書論の中でも、極めて特殊な存在であり、その後、日本人士に渡った各種王書に寄せる跋では、基本的な論点において、「温泉銘」王書論とは対立を孕む見解も生じていた。「温泉銘」解説にみる内藤の王書観の集約的な体現は、後半期の複雑化する議論と鮮明な対照をなすもので、そこに内藤王書論の画期が認められた。

ところで、「敦煌発掘の古書」は、時の史学研究会が、発見直後の敦煌文書の写真を展示するという併催企画に因んで草されたものである。この展示（敦煌文書写真展）について、研究代表者・菅野智明は、その後に京都で開催される大正癸丑蘭亭会との関わりに着目し、敦煌文書写真展が内藤の主導によって一つのスタイルを確立し、それが大正癸丑蘭亭会の開催へ決定的な影響を与えたという仮説の立証を試みた。検討の結果、内藤による温泉銘関連の参考資料の展示が、複数の蘭亭と王羲之関連書跡の名品を一堂に集めた点に加え、時宜や新聞広報、そして学術界・収蔵界の協同を意識したスタイルによって、大正癸丑蘭亭会へ最も直接的に影響を与えたことが明らかとなった。

・犬養木堂（1855～1932）

犬養木堂も、中国書画碑帖の日本流入に深く関与した一人である。研究協力者・下田章平は、鷲尾義直『犬養木堂書簡集』（人文閣、1940）、『新編犬養木堂書簡集』（岡山県郷土文化財団、1992）を分析し、犬養の中国書画碑帖の日本流入に果たした役割及び収蔵家間ネットワークの形成過程について検討した。検討の結果、まず犬養には中国書画碑帖の収蔵家としての側面があることが明らかとなった。すなわち犬養コレクションの内容は竹浪遠氏が指摘するように規模はそれほど大きいものではなく、犬養本蘭亭序や明賢尺牘のように購入したものも見受けられたが、『木堂翰墨談』で著名となって鑑定家として認知されたのちは、書画を贈答品として受け取ることができることが多く、また選挙の資金繰りや別荘地拡張のために中国書画を売却することもあったようである。犬養が中国書画碑帖の日本流入に果たした役割として三点指摘した。第一に鑑定家としての役割である。書の様式から臨摹本と判断し、また題跋等の文献から真偽を確認するなど、現代から見ても遜色のない鑑定を行っている。第二に、収蔵家間ネットワークの「ハブ」としての役割である。長尾雨山・内藤湖南・榊原鉄硯・原田庄左衛門・柚木玉邨らを書画収蔵・鑑定の相談相手とし、羅振玉コレクションを伊東巳代治に、廉泉・林長民コレクションの売却指南も行っている。そして、犬養の書画収蔵・鑑定・販売に関わる事務局として博文堂が携わっていた。こうした犬養の収蔵家間ネットワークは関東、関西、中国を問わず広がっており、特に来日した中国人コレクターはまずは犬養の鑑定を受けるのが常となっていたようである。以上のように、犬養の収蔵に果たした役割は多様であり、収蔵家間ネットワークの中心人物としての役割を果たしたことが明らかとなった。また、晩年にはそれに対する関与が減少するが、首相に代表されるように政治家としての活動が目立つようになったからであると判断した。

③ 流入経路の実際

研究分担者・増田知之は、中国書文化の日本流入の実態を検討するために、まず中国から齎された法帖の日本国内における流通・伝播の側面に焦点を当て、公益財団法人日本習字教育財団観峰館が所蔵する『御跋趙孟頫十札法帖』を取り上げて検討を加えた。本帖は、元の代表的書人・趙孟頫が石巖らに宛てた十通の尺牘を刻した「単帖」で、清・乾隆帝の御跋が付されていることを大きな特徴とする。上篇では、付刻された御跋や他の跋文を読み解くことによって、本帖の刊行の実態や意義を明らかにした。本帖のもとになった尺牘十通は清代に入って王鴻緒のもとに帰し、その子・図炯により乾隆帝に進上されたが、帝は題跋を認めて王氏に返却し、のち法帖として刻され広く流通するに至る。かような皇帝と臣下との一連の遣り取りは、「進上→下賜→刻帖による伝播」という構図でもって清代書法史の一側面を端的に表しているといえる。また本帖には、観峰館所蔵の二件（同版にかかる）のほかに、筑波大学附属図書館、安田女子大学図書館、一橋大学附属図書館など国内の諸機関に収蔵されている別本が存在する。そこで、下篇では、上記所蔵機関における実見調査の成果を踏まえ、各所蔵本の実態ならびに観峰館本との比較検討を行った。刻入書跡（尺牘や跋文）の状態や法量など諸項目について具に分析を加えた結果、観峰館本は「已に断泐し」尺牘の一部やいくつかの跋文が失われた原石から椎拓し装幀されたもの、また筑波大学本は、原石初拓本を入手した某かによって忠実に翻刻されたものであると考えられる。一方、安田女子大学本、一橋大学本はそれぞれ前二者とは異なるバージョンであり、その来歴は明らかではないが、あるいは日本で翻刻された所謂「和刻法帖」の可能性も指摘できよう。

④ 影印出版物にみる流入の実際

博文堂（油谷博文堂、博文堂合資会社を含む）は、辛亥革命を期に日本に流入した中国書画の優品を精緻なコロタイプ印刷で影印出版した先駆として知られ、かかる中国書画の購得を日本人士（特に関西の財界人）へ周旋・仲介する役割を担ったことでも、近代の収蔵界において特筆される存在となっている。既に明らかにされているように、時に博文堂の影印出版に助言を与えた顧問格の筆頭は内藤湖南であり、また影印出版物の原件は、時に京都へ避居していた羅振玉の蔵品が圧倒的な割合を占めている。研究代表者・菅野智明は、油谷博文堂時代における中国法書の影印出版について、その具体的内実を明らかにしつつ、そこに反映された内藤と羅の志向を探った。検討の結果明らかになったのは、多様な法書を評価し出版化させる用意がありながら、羅との棲み分けを図るように、選択的に王羲之礼賛のポーズを強める内藤と、それに応ずるかのように、各代の碑帖墨跡について遍く出版を目指す羅という、双方の異なる志向と、それを相互に理解するが故の協働作用である。更にそこには、影印出版（従前は著録や刻帖）本位で文物売買を加速させる収蔵観や、影印出版を前提とした題跋の執筆、或いは出版による文物保護・伝承の強化など、清末の出版・収蔵界で形成された新しい考え方が、羅によって国境を越え、博文堂へ波及したことも明らかとなった。

(2) 主要収蔵家のネットワーク分析

① 対象

上記した個別研究の成果において、特に注目されるのは、研究代表者・菅野智明が取り上げた羅振玉の訪日日記「扶桑再遊記」である。そこには、京都の他、特に東京を拠点とした中国文化精通者との交流が克明に記されているが、その交流は、これ以後急速に発達する日中収蔵家ネットワークの先鞭に位置するものと見てよく、本研究では、この日記に認められるネットワークの分析から着手することにした。

② 諸データの採取

日記から採取するデータは、基本的に羅が日本人（組織）と対面（訪問・来訪）の実現が確認できたものに限り、組織名と個人名が併記される場合は、個人名を優先して採取することとした。対面のあり方では、複数人が一堂に会するグループ対面と、個人同士の個別対面を区別する。また、対面には至らなくとも紹介や書信・物品の贈呈の事跡についても、対面に準ずるデータとして採取した。

③ ネットワークグラフの描画と各指標の分析

研究分担者・猿渡康文は、上記②に基づき、先掲の Cytoscape(version3.4)によって、ネットワークグラフの可視化を試みた。日記では、羅との対面が複数回に及ぶ場合があるが、重複エッジではなく、ひとつのエッジとして扱い、また単純化のため、エッジの向きを無視した無向エッジによる単純グラフとした。描画に至ったグラフは、ネットワークの全体、羅を取り除いたグラフ中の最大コンポーネント、最大コンポーネント中の対面ネットワーク等、各種にわたり、それぞれにおいて上位のノードにおける各種の中心性を分析した。

④ 分析結果と考察

上記の分析により、特に田中慶太郎、河井仙郎、平子尚、島田翰という四者に、高い中心性が看取された。彼等は「ハブ」、そして「ブリッジ」として機能するノードであり、かかる四者が各々の役割を分担するごとく整然と仲介・紹介の機能を果たしたこと、そこに羅と主要な中国文化精通者との効率的かつ広汎なつながりの実現が見通された。更に、かかるネットワークは田中の主導で形成された可能性が極めて高く、その背景に、田中をはじめとしたハブ-ブリッジが、同世代異業種の間柄により結束を強めた可能性が高いことも指摘できた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

①<u>菅野智明</u>、端方における所蔵碑拓の改装について、中国近現代文化研究、査読有、18 号、2017、pp.1-29

②<u>菅野智明</u>、内藤湖南と敦煌文書写真展―温泉銘の解説と参考資料の展示を中心に―、書芸術研究、査読無、10 号、2017、pp.68-80

③内田誠一、<u>増田知之</u>、吉良史明、近代日本における短冊の蒐集とその周辺―短冊蒐集をめぐる文事と交流を中心に―、公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集、査読有、3 巻、2017、pp.129-137

④<u>菅野智明</u>、羅振玉と明治末葉の東京、中国文化、査読有、74 号、2016、pp.80-92

⑤<u>増田知之</u>、観峰館所蔵『御跋趙孟頫十札法帖』に関する一考察（下）、観峰館紀要、査読無、11 号、2016、pp.4-15

⑥<u>菅野智明</u>、内藤湖南対敦煌拓本《温泉銘》之所見―兼論内藤的交友及其王羲之観―、饒宗頤教授百歳華誕国際学術研討会会議論文集、査読有、3 巻、2015、pp.1419-1426

⑦<u>菅野智明</u>、博文堂における中国法書の影印出版について、中国近現代文化研究、査読有、16 号、2015、14-52

⑧<u>増田知之</u>、観峰館所蔵『御跋趙孟頫十札法帖』に関する一考察（上）、観峰館紀要、査読無、10 号、2014、pp.4-27

〔学会発表〕（計 9 件）

①<u>菅野智明</u>、内藤湖南と敦煌文書写真展―温泉銘の解説と参考資料の展示を中心に―、書論研究会関東部会、2017 年 3 月 13 日、六英社（東京都渋谷区）

②<u>菅野智明</u>、「扶桑再遊記」にみる羅振玉と

日本人－社会的ネットワーク分析の視点から－書学書道史学会、2016 年 10 月 2 日、滋賀大学（滋賀県大津市）
③菅野智明、羅振玉と明治末葉の東京漢学界、書論研究会関東部会、2016 年 3 月 14 日、六英社（東京都渋谷区）
④菅野智明、内藤湖南対敦煌拓本《温泉銘》之所見－兼論内藤的交友及其王羲之観－、饒宗頤教授百歳華誕国際学術研討会、2015 年 12 月 7 日、香港大学（中華人民共和国香港）
⑤増田知之、朝鮮時代公文書における草書－東アジア書字文化比較研究の試み－、U-PAL（東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄附研究部門）主催討論会、2015 年 9 月 21 日、東京大学（東京都文京区）
⑥菅野智明、博文堂における中国法書の影印について、書論研究会関東部会、2015 年 3 月 16 日、六英社（東京都渋谷区）

６．研究組織

(1)研究代表者
菅野　智明　（KANNO,Chiaki）
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：90272088

(2)研究分担者
猿渡　康文　（SARUWATARI,Yasufumi）
筑波大学・ビジネスサイエンス系・教授
研究者番号：00292524

増田　知之　（MASUDA,Tomoyuki）
安田女子大学・文学部・講師
研究者番号：60559649

(3)研究協力者
下田　章平　（SHIMODA,Shohei）